

---

# 空の皇兵

神風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空の皇兵

### 【Nコード】

N3097D

### 【作者名】

神風

### 【あらすじ】

まだ飛行機もテレビも無い世界。人間と龍によって彩られる歴史の中で、その一端を背負う人々の物語

## 電話 少年少女

「して、神宮生徒！これからどうやって盤上をひっくり返す？！なかなかどうしてよろしくない状況だがねい！！」

少女は叫んだ。腹の底からの大声であった。世界中の人間に言い聞かせるつもりであるかのような怒声であった。

だがそれでも、真正面からなだれ込んでくる気流が彼女の声の後方へと押し流した。

後ろで結んだ少女の長く優美な黒髪は、気流の中を所狭しと荒れ狂う号風によって乱暴に靡いていた。

チェックメイト  
「王手詰とは、いやはや勘弁願いたい！！」

口調からするに、少女は男臭く、ある程度の窮地に立たされても最低限のユーモアを忘れない（あるいは手放さない）類の人間であることが分かる。

そういう人間は大概にして人を惹きつける一種形容し難い魅力を持つているものだった。

ただ、そういう能力は目前に迫った実際の危機に現実的に対処し得るものではない。

チェックメイト  
彼女には王手詰となりつつある盤上をひっくり返すことはできなかった。

それが出来るのは、というか、その可能性を持っているのは、彼女の目の前で、彼女にその、決して大きくも頼りがいもない平凡な背中を向けている、一人の少年だけである。

少年は、猛る号風と唸る気流の中で、叫んだ。

チェックメイト  
「問題ない！！問題なければ王手詰でもない！！東雲！！僕たちは無事学校に戻る！！あの営庭に舞い戻る！！だから！あんまり急かすなあ！！」

少女の声は、号風に邪魔されながらもどうやら少年の耳には届いていたらしい。

しかし、それは当然であつた。

いかに乱気流をこそことばかり暴れ狂う暴風と言えども、少女は少年の背中にぴったりと抱きついていてるのだ。

つまりは、少女は少年の耳のすぐ後ろで叫んでいたことになる。

ならば聞こえぬ筈が無い。

ならばこそ、少年の叫び声も、なんら号風に邪魔されることなく少女に届くはずであつた。

少女は少年の真後ろにいる。号風は前から突っ込んでくる。

叫んだ少年の声は、冷たい号風に乗って少女の可憐な耳に器用に滑り込む。

少女は、滑り込んできたその声に応えた。

「おおそうかい！！そいつあ頼もしいお言葉だねい神宮生徒！！『あれ』に狙われて『問題ない』とはねえ！！さすがは！！そんじゃあ頼んだよ！！営庭まで！私を生きて連れててくれ！！とところで神宮生徒の教練空中格闘の評価項はいくつだったかねい！？」

少女は雄弁であつた。

男らしくはあつても女である。

こと喋る事に何かしら楽しみを感じるという点においては、他の女達の例に漏れなかった。

「やかましいな東雲！！！！急かすな茶化すな口を開くなあ！！！！」

少年には、なにやら余裕というものがないらしかつた。

「で？！いくつだった？！神宮生徒！！まさか『優』以外ってことはないだろう？！」

「やかましい！！」

「そうは言つてもねい！！自分の命を預けるんだから！！納得のいく回答を貰いたいんだがあ？！」

「東雲え！！」

「なんだい！？」

「僕を！！信じる！！信じとけ！！ソンはさせないから！！」

「おお・・・」

少女は、少し気楽な顔をした。  
そしてどこか嬉しげでもある。

というより、元より少年ほどは何も思いつめていなかった。

それはどうであれ現状を愉しむ性格のせいでもあり、少年に対する特殊な感情が手伝っている面もあった。

「よろしい！！神宮生徒！！今のは結構納得できた！！命預けるぜい！！せいぜい気張っておくれよ！！幸運を（ウィッシュユアラック）！！って、あたしも当事者なんだがねい！！」

少女は完璧な笑顔であった。爽快な表情のようである。顔面に吹き付ける号風など意に介していない。

一方で、少女の命を預かったらしい少年の顔つきは、頼もしい言葉とは裏腹にまったくもってよろしくない。  
というより、半分青ざめている。

少年は、自分の運命と、自分の背中に抱きつく少女を呪いたい気持ちでいっぱいだった。

少年の名前はじんぐうよしつく神宮義嗣

少女の名前はしのめれい東雲靈雲と言った。

少年少女は褐色の防寒着に身を包んでいた。襟元には金色の有翼星章が輝く。

それは紛れも無く、『皇州帝国陸軍龍空教導団』所属を示すものだった。

それはつまり、彼らを『軍人』たらしめている。

二人は今、空中を滑空している。

まぎれもなく、空を飛翔している。

だが、生身で、ではない。

無論、人間が空を飛べるはずが無いのだ。

では、どうやって彼らは滑空しているのか？

残念ながら、この世界は『飛行機』なるものが存在するほど科学が

頼もしいものではなく、そして無粋でもない。  
では何か？

彼らが、神宮と東雲と呼ばれる少年少女が空を舞うために駆るもの。  
彼らがまたがっているもの。

それは、

それは紛れも無く、

そしてどこをどう見ようが、なにをどう疑おうが、揺るぎもない。

それは

『龍』であつた。

神話に登場し、神の化身とも、天界の使いとも、はたまた破壊と戦争の象徴とも言われる、あの『龍』である。

詳しく、厳密に言えば、『翼竜』である。

大きな翼を持った、空を飛ぶ生物としては世界最大種であるあの『翼竜』である

今、神宮と東雲は『翼竜』にまたがっている。

手綱を引き『翼竜』を駆るは神宮少年である。

その背中に抱きつくのが東雲。

そして、二人をその背中に乗せ大きな翼を左右いっばいに広げ滑空するのが、翔空シヤウキウと名づけられた生後6年の灰色の雄龍であつた。

翔空の名づけ親は、神宮である。

この世界、決して一般的ではないが、人と龍は極めて近しい関係である。

例えるならば、人と犬の關係に等しい。

幼いころから接し、あるいは訓練すれば、龍は非常に人に対して友好的となるのだ。

それはつまりパートナーであつた。

友人である。

龍は人間の友人であり、かつ人間が空を飛ぶ唯一の手段でもあった。

（くそっ！！）

神宮は心の底で悪態をついた。

つまるところ現在の状況が、反吐を出したくなるような状況であるためだった。

彼の使い龍であり『幼馴染』である翔空は、全力で飛翔していた。申し分の無い飛びざまである。

まさに翔空は一級の早馬ならぬ早龍であると、神宮はこれまで評価してきた。

そして今日も、翔空はその評価に違わぬ疾風ぶりを存分に見せ付けている。

問題は、その後方1500メートルを付けねらってくる『あいつ』である。

（なんともしつこいカラスめ！！）

神宮は。またしても悪態をついた。今度は半分声に出ていた。

かれこれ30分後方を付けねらってくる『あいつ』とはつまり、野蛮で凶暴で翼竜の中でも調教が非常に難しいとされる野生の『黒龍<sup>ヘイロン</sup>』であつた。

黒龍<sup>ヘイロン</sup>は全身を漆黒の薄毛に包まれ、通常四本ある足が前足二本しか存在せず、縄張り意識が強く優美とは程遠い乱雑な形の翼を持つことで知られている。

人間に対したびたび被害を与えることから翼竜学者や翼竜関係の仕事に携わる人間からは悪意を持って『カラス』とあだ名されていた。その『カラス』が、今神宮達を付け狙っているのである。それは、もろもろの事情から非常にまずかった。

すべては、二時間前、東雲霊雲の言葉から始まった。

時計の針は午後三時を指していた。

この日は数少ない貴重な『外出許可』のでた休日であった。

皆が皆急ぎ勇んで町へ遊びに駆け出した頃、神宮は龍舎で翔空の腹の調子を見ていた。

前日、排便の様子からあまり調子が良くないようであったため神宮はかなり気にしていた。

神宮にとって翔空は貴重で特別な友人であり、空を飛ぶ唯一の存在であり、彼の在籍する『皇州帝国陸軍龍空教導団』は手持ちの龍を痛めたものには極めて居心地の悪い場所であった。

空を飛べぬ龍に用は無い。そういう場所だった。

何よりも鉄の袋とも呼ばれる丈夫な内臓器官を有する龍が腹を壊すなど、不治の病に冒されたと同義である。

大げさに聞こえるだろうが、腹を壊した龍が数日後に病死など珍しくないのだ。

そのため、神宮は非常に心配し、貴重な外出許可の出たその日もどこにも行かず翔空に付きっ切りだった。

もしかしたらこいつは死ぬんじゃないか？そんな大層な不安に駆られていた。

んが、蓋を開けてみると翔空はびんびんしていた。

飯も食う、よく動かし立派な便も出す。午後、予定していた龍医に診てもらったところ「健康そのもの」との回答を得た。

神宮はあまりのあっけなさに脱力したが、翔空は珍しく自分に付きっ切りの神宮に対し悪びれる様子も無く遊びの相手をせがんだ。

龍医が「この程度で呼ぶな」と言いたげな視線をのこして龍舎を去った後、いまさら町へ遊びに行く気も失せた神宮はお騒がせな雄龍の相手をしてやった。

貴重な外出許可をどぶに捨てちまった、と後悔しても、たまにはこんなのもいいかと自分に言い聞かせながら翔空の鼻をさすってやった。

東雲が龍舎に飛び込んできたのはその時だった。

彼女は凄まじい勢いで神宮に近づき手を握ると、突然のことに困惑



する神宮をよそに言い放った。

「頼む！お前と翔空を貸してくれ！！」突拍子も無い言葉であった。  
なぜ？どうして？どういう意味だ？

言葉に出す前に表情に出ていたらしい。

神宮が声を発する前に、東雲はまくし立てた。

ここから東にある南北へ連なる「龍連山脈」には薄蓮花<sup>はくれんか</sup>というその  
地にしか咲かない希少な花があるらしい。

それはとても美しい様で、花は透き通るような白、その身は綿のよ  
うに柔らかく、風に揺らぐ様は現世無比の可憐さと言う。その上冬  
にも花を咲かせるとかいうじゃないか。

古くはそのごく少数が「龍蓮花」として皇族にのみ献上されていた  
宝物であつたとか。

それが、どうしても欲しい。

手に入りたい。

いや、個人的な趣味というわけではない。

美しいものに自分自身の価値を見出すような、私はそういう類の人  
間ではないさ。

だが、どうしても欲しいのだ。

ある事情があつてねい。

しかし、この花、厄介なことに龍連山脈の奥地にある龍峰山の山頂  
付近でしか確認されていないんだなあこれが。

つまり、人間が歩いていける場所じゃない。んまあそれ以前に登山  
する暇なんて無いしねい。

そこでだ。翼竜様のお力が必要なのだ！

翼竜ならひとつ飛びだろい？

ん？私の龍？

駄目駄目。あの子着地に失敗してさ。ほら、寸前に突風が吹いて足  
くじいて。

あと一日は安静にだとき。まあ翼竜は大事な体だしねい。

そこで！ね？神宮くん。あんたとあんたの翔空を貸して欲しい。これ！この通りだ！頼むよ！

私がこんなをお願いするなんて一生に一度あるかないかだよ？

ほらほらさあさあ！

うんといいな！

無論、断った。冗談ではない。

自分が世話をしていると言っても翼竜は軍の所有物である。翔空も例外ではない。

許可も無いまま翼竜に乗って大空へ、など、判明したら即刻懲罰ものである。

そんな危険は冒したくは無い。今までそれとなく成績を稼いできたのだ。

もしかしたら全ての努力が水泡に帰すではないか？

そんな分けの分からない花の為に教導団での経歴に傷をつけたくは無いのだ。

誰だって保守的な軍の中でやんちゃぶりを発揮しようとは思わない。それは確実に自分の出世に影響を及ぼす。

悪いが、無理だ。教官に見つかったらどうする気だ？

なあに心配ない！総員点呼が行われる六時までに戻ればいいのさ！花を取るだけ！すぐ終わるって！

東雲は快活な性格そのままに、明るい印象そのままの表情と口調で神宮に協力をせがんだ。

こんなこと頼めるのはあんただけだよ！

そうは言ってもな…これはいくらなんでも。

それに、私に恩を売っておいたほうがいいと思うがね。後々得には

なつても損にはならないはずだぜい？

何を言つて…ああ、そうか。そういや東雲の親父は

そうとも！天下の帝国陸軍参謀本部作戦部長、東雲零弦<sup>しののめれいげん</sup>少将閣下さ！  
教導団卒業の暁には、それなりに口を利かせてしんぜよう。

出世に有利なことこの上ないと思うが？

少なくとも花一つと引き換えに出世道、比べるまでもないんじゃないかい？

……

結局、神宮はえさに食いついてしまった。

やはり彼も野心とは無縁ではないのだ。

軍人になるもののほとんどが絶対的ヒエラルキー社会である軍において、少しでも多くの権力を得たいと夢想するのが常であった。

流石は神宮生徒！！話の分かるお方だねい！

（なあにが…）

神宮は翔空にまたがり、冷たい号風にもまれながら、後ろをつけねらう『カラス』に注意を配りつつ、表情をゆがめた。

（花を取るだけ、だ！）

状況は、非常によろしくない。

花は取れた。んが、龍峰山の峰に着地して東雲が花を取ってくるのを待っている最中、『奴』に見つかった。

不運なことに、というか無学であったのか、龍峰山近辺は長らく人の手が入っていない原生地帯であったため、野生動物・原生生態系の支配する人ならざるものどもの領域であったのだ。

そして、あの野生の『黒龍』に見つかった。

『カラス』は神宮達を目視すると低空で山を掻き分けるように飛びながら接近してきた。

それにいち早く気づいたのは同じ翼竜である翔空だった。

翔空の唸り声に異変を感じ、次に神宮が『カラス』の存在に気づいた。

まずい、狙われている。

神宮は翔空にまたがり手綱を握り滑空姿勢をとった。山の峰から飛び降り一気に加速し一目散に逃げるつもりであった。

俊足が売りの翔空ならばそんなことは朝飯前である。

だが、東雲がまだ戻っていなかった。

神宮は焦った。

一旦飛び立って『カラス』を追いついてから東雲を回収しに戻ってくるか？

いや、不可能だ。幾度も体験した教練空中格闘講義がその可能性を否定した。

人を背中に乗せた翼竜は、空中格闘を好まない。

アクロバット・フライト

なぜなら激しい格闘飛行は背中に乗る龍使いを振り落としてしまう危険が非常に高い。

空中で振り落とされることは、すなわち死である。

龍は人間がか弱い生物であることを知っている。

彼らはむざむざパートナーを危険にさらそうとはしない。

万が一野生の龍どもに目をつけられたら、ひたすら逃げろ。それがもつとも現実的だ。

教官からはそう教わった。

だが東雲を置いて逃げればどうなる？回収に戻ってくるのは困難だ。見捨てるなど言語道断。

無断飛翔の上、同僚を見捨てればどうなるか？ただの処罰ではすまないだろう。

その上東雲の親父は陸軍のお偉いさんなのだ。

くそっ！！

そうこうしているうちに『カラス』は大きく距離を詰めてきた。

翔空はまだかまだかと神宮の滑空命令を待っている。

早くしないと、追いつかれる。

その時だった。東雲が現れた。

どうやら彼女も『カラス』に気づいているらしく、全力疾走である。片手にはあの薄蓮花。背中には通常の小銃の銃身を短く切り詰めた『騎銃<sup>カビシ</sup>』を提げていた。一応、野生の熊に出会ったときに備えて持ってきたらしい。

「神宮！！『カラス』だ！！狙われてる！！」

「分かってる！！お前が遅いせいだ！！」

そんな短い怒号のやりとりの後、東雲は翔空に飛び乗り神宮の背中にぴたりと抱きついた。

神宮は背中にあたる少し小さな盛り上がりにつつを抜かす余裕も無いまま、翔空を駆り山の峰から飛び降りた。

すさまじい号風が身を包む。空を生活の場とするものにはおなじみのものだった。

風は冷たい。

気温は摂氏10度。真冬である。号風によって体感温度はさらに低い。防寒着に守られていない顔は寒気に対して無防備である。

鼻水が垂れて固まった。

翔空は低空を飛ぶ。山と山の間、谷の中、森のすぐ真上を高速低空飛行する。

それは、山間部における追跡する敵を追い払うもっともポピュラーな飛行方法であった。

山々が入り組む山脈地帯を低空で縫うように飛べば、いずれ敵は障害物の陰に隠れ自分達を見失う。

基本的な、だが高度な飛行技術と度胸を試される戦術だった。

山の斜面や生い茂る木々に少しでも接触すれば高速で飛翔する龍は大怪我を負う。

そうなれば、墜落確実であった。

しかし、『カラス』は臆することなくぴたりとついてくる。

（ああ！くそっ！）

神宮はいまさらながらに気づいた。

人から餌を貰う軍の翼竜と違い、野生の連中は自分で獲物をしとめ腹を満たす。

ならば、あの『カラス』は幾度と無く低空を舞い山や木々を潜り抜け、川の水を飲む鹿達を狩ってきたはずだ。

つまり、この山脈地帯の低空は、『カラス』にとって庭のようなものだ。飛び方を知っている。

神宮達は進んで相手の得意とする土俵に舞い込んでしまっていたのだ。

（まずいな。どうする？このままじゃ埒が明かない。いや、埒が明かないどころじゃない。このままじゃ、やられる）

『カラス』は確実に距離を詰めていた。俊足であるはずの翔空は敵を振りほどけないでいる。

仕方なかった。背中に二人も人間を乗せているのだ。

実際のところ、翔空にとって神宮と東雲は敵よりもやっかいな重荷となって機能していた。

その上、彼ら二人を振り落とさないように気をつけながら飛び続けなければならぬ。

独り身で思う存分乱暴なアクロバット飛行のできる『カラス』の方が、低空飛行には圧倒的に有利である。

さらに悪いことに、低空飛行はやたらと体力を消耗する。風が少ないからであった。羽ばたかねばならぬ。

高空であれば常に強い風が吹き荒れているため、風に乗って飛行できる。揚力が得られる。

だが、低空では、山々の間ではそうはいかない。羽ばたけば、体力を消費する。

そして、翔空は未だ生後六年の子供であった。

対する『カラス』は齡20年はあるうか。完全な成龍である。体力面でも、『カラス』が有利であった。

（すべてがすべてこちらに不利！逃げているつもりが敵のいい様に

料理されているのか?!とにかく、このままじゃ確実にやられる。  
どうにかしないと)

神宮は焦った。焦っていた。心臓が早鐘に成り変っている。血圧が異常に上昇する。

尋常ならざる精神状態のなか、彼は最低限冷静さを保とうとしていたが、目はすでに血走っていた。

いったい自分達がどれほどまでに追い詰められているというのか?!  
このまま『カラス』に文字通り翔空の尻尾に噛付かれ、失墜させられ、地面に落ちたところをジックリ食されるのか。『カラス』の血肉に成り果てるというのか?

それだけは嫌だ。死ぬにはまだ早すぎる?まだ18だぞ!!まだまだやりたいことだって食いたいものだってたくさんあるのに!!  
だが、逃げる術がない。

確実に、追いつかれる。

『カラス』は、いつの間にか真後ろに迫っていた。

東雲が叫ぶ。

「神宮!!来るぞつ!!!!」

神宮は声に呼応するように後ろを振り向いた。

『カラス』のでかく漆黒の異形な図体が、大きな翼を力強く羽ばたかせながら、翔空に覆い被さんとしていた。

『カラス』は大きく口を開き、いかにも凶暴そうな大きな牙を見せ付けた。

(まずい!!!)

上方から一気に襲い掛かり、翔空の胴体に噛付くつもりだ。

この攻撃方法は黒龍など気性の荒い龍に見られる独特のもので、専門家の間では「がぶりつき」と言われていた。

(くそくそくそくそ!!!)

避けなければ!!避けなければやられる!!食われる!殺される!興奮と恐怖と焦りが極限に高まった。

常に前方を向いて飛翔する翔空は後方の危機的状況に気づいてない。自分が、何とかしなければ。

その時前方に深く長い直線的な谷が見えた。

（あれだ！あれしかない！）

とつさに、神宮は翔空を谷の中に突っ込ませた。

間一髪、であった。

翔空が谷の中に滑り込んだのと、『カラス』が上方から噛付きにかかったのは、ほぼ同時である。

「おおう！！？九死に一生つてやつかい？！！」

常に後ろを振り向いていた東雲が叫んだ。

『カラス』の攻撃はとつさにかわされた。

噛付こうとした牙は空を切り、翔空の尻尾に『カラス』の鼻がかすただけであった。

尻尾の先を感じた違和感に、翔空は先ほどまで自分がどれほど絶体絶命的な状況であったのかを悟り、思わず雄たけびを上げた。

甲高く、野太い鳴き声である。

鳴き声は谷の中に響いた。

そして状況はまったくもって改善されていなかった。

むしろいよいよ以って王手詰である。チェックメイト

谷の中では、逃げ場が無い。

左右は岸壁、直線飛行するしかなく、敵はじつくりと狙いをつけられる。

上下に逃げるしかないが、『カラス』は再び羽ばたき上方から覆いかぶさるうとしている。

「がぶりつき」だ。今度こそ仕留めるつもりである。

眼下は、濁流。

もう逃げ場がない。

「まずいな！！来るぜい神宮！！やつこさん、やたらと気が立ってるらしいな！！」

闘争本能に酔っているのだ。もはや狩猟目的ではない。



狩りたい。

ただその一心だろう。

ここで翔空を仕留めても、獲物は谷の下に墜落し濁流に吞まれ肉は流れていく。

腹は満たせない。

なのに襲い掛かってくるのだから。

そういう面で、龍は人間に近いのかもしれない。

殺害、という行為に、生命活動の範疇外の価値観を持っている。

「どうすんだい！！」

東雲が叫んだ瞬間、神宮は力いっぱい手綱を引いた。

それに応じて翔空が首を上げ、全力で翼を羽ばたかせ急上昇する。

ほぼ垂直に近い角度であつた。

覆いかぶさるうとしていた『カラス』はとつさに減速し、衝突を避ける。

翔空は突き抜け、谷の中から飛び出した。

脱出成功である。

東雲は驚愕したようであつた。振り落とされないように力強く神宮に抱きついている。

背中越しに神宮の息遣いが聞こえてきた。

かなり興奮している息遣いである。

「やるねい神宮生徒！！危機からの脱出だね！でも、あきらめる気は毛頭無いらしいよ、奴さん！！」

『カラス』はすぐさま体勢を立て直し追撃してきていた。

急上昇は翔空から大きく体力を削り取っている。

すぐに、追いつかれる。

その時、神宮が叫んだ。

「東雲！！お前、確か騎銃持ってたな？！」

さっきまでとは調子の違う声だった。

なにやら、確信めいた響きがある。

東雲は、同じように応えた

「ああ！！持ってるよ！！弾薬だつてある！！いざつて時のために持ってきたんだけどない！！軍人の職業病さ！！銃が無けりや安心できない！！」

「今がいざつて時だ！！」

「なにい？！！」

東雲は眉をひそめ、神宮は続けた。

「『逆落とし』だ！！一氣に蹴りをつける！！あいつを仕留めろ！！」

「なあ？！！」

東雲は流石に驚愕した。お茶らせる余裕も無い。

逆落とし、だあ？逆落とし、だと？本気で言ってるのか？

『逆落とし』とは、翼竜兵が用いる一つの戦法である。

下方から上昇してくる敵に対し、真正面から体当たりするように上方より下降しつつすれ違う直前に攻撃を加えるという、一昔前の騎兵同士の一騎打ちに似た戦法である。

攻撃した直後、お互いが逆方向にすれ違うことを利用しそのまま逃走する「一撃離脱戦法」としても知られていた。

攻撃をかける方は上方から下降するため加速する、そのまま逃げるのが非常に簡単なのだ。

攻撃であると同時に逃走手段でもあるという異色の戦法だった。

しかし、翼竜兵の本分が偵察任務であること、格闘戦を最終手段として捉えていること、翼竜兵同士の戦いなど非常に稀であることから実際に行われた例は極めて少なく、そのうえ真正面から突撃する形になるので正面衝突の危険性もあり、その有効性が甚だ疑われていた。

その中でも東雲は、教導団で逆落としの講義を受けたとき、この戦法の有効性にもっとも大きな疑問符をつけた人物である。

その人物が、逆落としをすると告げられたら、どんな顔をするだろう？

「馬鹿言うな!!」

東雲が叫んだ直後、翔空は無理やり右旋回し、180度逆を向いた。

首を下に下ろし、一気に下降する。

前方からは、正面から上昇してくる『カラス』の姿が見える。

完全に、『逆落とし』の体勢だった。

もう、引けない。

「やれ!!東雲!!銃であいつを撃て!!」

『カラス』は大きく口を開け雄叫びを張り上げる。翔空はそれに呼応して大きく雄叫びを上げた。

もはや、両雄は決戦を覚悟している。いまさら進路は変えられない。

「ああもう!!」

東雲は、覚悟した。

「まったくもって生きた心地がしない!!!!」

背中にかけた騎銃を手に取り、両足を神宮の足に絡ませた。

それに応じて神宮が上半身を翔空の背中に貼り付けるように伏せる。

東雲の前方が開けた。

両手で銃を構える。いまや東雲の体を支えているのは神宮の足に絡めている二本の足だけであった。

風圧で体が飛ばされそうになる。

焦るな。

怖がるな。

体よ震えるな。

銃床を肩にしっかりと付け、照星に『カラス』を捕らえる。

距離は、800メートル。

だが、高速で飛翔する2体の龍の相対距離は急速に縮まっていく。

600、500、400…

まだだ、まだ撃つな。

落ち着け東雲霊雲!

ただでさえ狙撃精度の悪い騎銃だ。龍の上から撃つたら狙撃精度は

さらに悪くなる。

十分引きつけないとあたらない！！

真正面から突っ込んでくる『カラス』の姿が、恐怖を撒き散らし、早く引き金を引いて銃をぶっ放したくなる衝動にかられる。

だが、東雲は必死にその衝動を抑えた。

チャンスは一度きり

十に八は望み無し

まぐれであたるはずも無し

ならば一発入魂

「魂込めろおお！！！！」

叫んだ東雲が引き金を引いたのは、距離が50メートルを切ったその瞬間だった。

銃口から飛び出した弾丸は、炸裂した弾薬の運動エネルギーを全身に受けて滑空する。

ゼロコンマ数秒の微小な飛翔時間を置いて、黒い弾丸は、今まさにかみつかんとする『カラス』の顔面にめり込んだ。

硬い皮膚を突き破り、肉を引き裂き、骨を砕いた。

小さいが、強烈な一撃。

野生動物が経験したことのない、銃弾の暴力であった。

『カラス』が異様な叫びを上げ身を捻じらせた瞬間、神宮はとっさに手綱を引いて『カラス』との正面衝突を避けた。

『カラス』とすれ違つと、そのまま飛翔し今度は逃げの体勢に入つた。

見事な、一撃離脱戦法。

まさしく模範的な『逆落とし』であった。

神宮は身を起こし後ろを振り向いた。

『カラス』は急激に高度を下げ、適当な着地点を探しているようだった。

余程痛いらしい。

あれでは、まず追撃してくることはないだろう。

東雲が、叫ぶ。

「ハッハア！！見たか？！神宮生徒！！一発必中だ！！すごい！狙撃兵に転身しようかな？！」

どうやら勝利に酔っているらしい。

いや、奇跡を起こした自分自身にか。

どちらにしろ、無茶をしたのは確かだった。

もちろん、神宮が、だ。

その本人は、余程安心して力が抜けたらしくため息をついただけだった。

「とにかく、たすかった……」

「やったねえ！！神宮生徒！！生きた心地がなかったねえ？！」

東雲は極限状態の開放から変な精神状態であった。

やはりまあ彼女もそれなりに緊張していたらしい。

さすがにあの状況は楽しめなかった。

「いやはや、男だよ神宮生徒！！あんなむちやする私達あ漢だ！！」

あんたも漢！私も漢！翔空も漢！みんな漢だよ！！」

「お前は女だろ……」

そうつぶやいたが、東雲には聞こえなかったらしい。

まあ、別にいい。気持ち弾むのもわかる。

ある意味で貴重な体験だった。

野生の黒龍に襲われ絶体絶命の状況をまったく前例の無い危険な戦法で打開する。

のちのち言い話のネタになるだろう。

神宮はすっかり手綱を緩めている。

今は翔空の好きに飛ばしてやろう。

なにしろ、つかれた。少し休みたい。

まあ翔空も学校の場所くらい知っている。こと空のことに關しては僕以上に詳しいはずだ。

勝手に学校まで僕らを連れてってくれるさ……ん……？

その時、神宮は何かを思い出しそうだったが、

「いやあ……！天晴れ！人間最後まで全力を尽くすもんだね……！」

今だ勝利に舞う東雲の明るい声に綺麗さっぱり押し流された。

案外、この声は聞いていて心地よいのだ。

「ごらんよ！神宮生徒！夕日さ！もうこんな時間なんだね！なあんか、今見ると格別だねえ！一日の終わりって気がしないやい！」

「ああ、まったくだ」

東雲の言うとおり、西に沈む夕日はやたらと綺麗であつた。

ああ、夕色にそまる龍連山脈を眺めながら帰るつてのも、なかなか一興かもしれない。

酒があれば、なおさらだな。

年甲斐もなく、そんなことを考えた自分に少し微笑んだ。

背中に張り付く少女の体温が心地よい。

んが、既に時刻は6時30分を過ぎていた。

学校では町に遊びに行っていた連中が戻り、総員点呼がかけられすぐさま神宮と東雲が『行方不明』であることが班長より教官に報告された。

ほどなくして龍舎から翼竜が一匹『脱走』していることが発覚し、急遽生徒教官総出で『搜索隊』が組織され、大騒ぎとなる。

## 式話 少年少女2

この、

大馬鹿者どもが!!!

無断で翼竜を飛ばせた挙句、総員点呼の時間を完全無視とは何事かあ!!!

貴様ら、総員点呼が軍隊生活に於いていかに重要な定期措置かを未だ理解しておらんようだな!!!

一人でも欠けておれば、部隊全体の規律と秩序が瓦解していることを意味するのだぞ!!!

一人でも欠けておれば、部隊全体がその一人を探し出し異常を見つけて出すために全ての予定行動を繰り下げねばならんだ!!!

つまりは、貴様ら二人の為に総勢120名が2時間足止めを食らった!!!

一部の人間が、その他多数の足を引っ張るなど、軍隊においては致命的症状だ!!!

予定されている行動を、予定通りに遂行する、それが組織であり、軍隊である!!!

私情に駆られ勝手な行動を取りそのために予定事項を投げ捨てるなど、貴様ら軍人失格だあ!!!

恥を知れ!!!

神宮生徒!なぜ無断で翼竜を飛ばした!

なに?花を取りに、龍連山脈まで飛んでいく為だと?

ふざけるな!!!説明になつとらん!もつとマシな言い訳を考えろ!!!

東雲生徒!なぜ総員点呼の時間までに戻ってこなかった!

ああん?途中で野生の黒龍（エイロン）に襲われて、撒くのに時間が掛かっただあ?

貴様、人を馬鹿にしておるのか!!!誰がそんなあからさまな作り話

を信じるか！！餓鬼でももつとマシな嘘をつく！！

俺には分かっているぞ！貴様らが何をして何のために遅れたか！

男と女の關係に、うつつを抜かしておったのだろぅがぁ！！！！

教導團は忠信奉公の軍人精神を鍛える場であるというのに、俗な感情におぼれおつて！！まったくもってけしからん！！

貴様らのような不純な奴らがいるからこそ、竜兵は軟弱者だと他兵科の者に陰口を叩かれるのだ！！

なに？男と女の關係とは、断じて違ふだと？

やかましい！！誰が喋っていいと言ったか！！

貴様ら晩飯抜きだ！！

東雲生徒！！二日間の謹慎処分を命ずる！自室から一步も外に出るな！！自省の句でも書いておれ！！

神宮生徒！！貴様は全校舎の全室清掃活動を命ずる！埃一つ残すな！！すべて掃除が終わるまで一睡もしてはならん！！

教導團が決定した二名に対する処罰は以上だ！

ああ、それと神宮生徒。貴様には特別にくれてやるものがある。

そう言われると、神宮はその顔面にありがたく鉄拳を頂戴した。

情けなくもよろけ、体が後ろに倒れた。軽い脳震盪を起こしていた。かまわずバケツと雑巾を投げつけられ、とつと行つて来いと恫喝された。

東雲は別の教官によつて自室まで連行された。

神宮はバケツと雑巾を持つてクラクラする頭に悩まされながら、教官室からおぼつかない足取りで逃げるように退室する。

その背中に一言、

「本来なら息の根を止めてやるところだ！！」と吐き捨てられた。どうやら九死に一生を得ていたらしい。鉄拳を頂戴した顔面からは鼻血が垂れていた。

そして今、日が暮れとつぷりと闇に浸かった校庭を背に、木の匂い



が充満する講義室の机を拭いている。

雑巾は水絞りをしてあった。真冬の水仕事に手が冷えている。

「はあ……」

ため息も出る。

結局のところ、東雲の提案は、最悪の結末を迎えていた。

総員点呼が行われる6時には間に合わず、学校に到着したのは二時間遅れの8時であった。

その頃には学校に人気はなかった。

生徒教官総出で姿を消した神宮・東雲、そして翼竜の翔空を探し出そうと、搜索に出払っていたのだ。

すべてを悟った神宮の顔面からは、血の気が引いた。

とんでもない事態であった。これほどの大騒ぎを引き起こしたとなれば、ただでは済まない。

いつそのまま失踪したい気分になったが、さすがにそういう分けにもいかない。

東雲も覚悟を決めようと言い出したので、そのまま教官室に出頭し、全てを話した。

主任教官は、地獄から這い上がってきた鬼であるかのような恐ろしい表情を顔面に張り付かせると、人間が発声し得る限りの怒声をもつて怒りをぶちまけた。

浴びせかけられるだけの罵声を浴びせ、叱りつけた後、教官達で話し合って処罰を決めるからそれまで廊下で立っていると怒鳴りつけた。

神宮は、自身の成績表に取り返しのでない打撃を与えてしまったことを嘆いた。

花を取ってくる。それだけの為に、あまりにも高い代償を払ってしまった。

廊下の窓の外に広がる夜闇のごとく、神宮の心は消沈した。

その横で同じく『不良生徒』である東雲は大して悪びれる様子も無

く、

「やつちやつたねえ」と、これまた快活に話した。  
神宮は反応せず、ただ頭を抱えた。

例え全ての講義室を新築同様に磨き上げたとしても、成績評価欄がかつての姿を取り戻すことは無いだろう。

これは純粋な処罰なのであり、刑期を負え刑務所を出所した元罪人であったとしても、前科持ちの刻印が一生付いて回ることで同様である。

「はあ……」

何度目のため息であるかなど、皆目見当もつかない。  
ともかくにも、清掃活動は遂行せねばならない。でなければ睡眠が取れない。

と言つても、全室清掃など、並大抵のことじゃないぞ！  
きつと終わる頃には、東から日が昇っているに違いない。  
ああ、もうため息も出尽くした。

机を全て拭き終わると、今度は窓ガラスだ。台となる椅子を引きずって、窓辺に寄る。

しかし、それにしても僕と東雲じゃあ、処罰の程度がずいぶん違うじゃないか！

自室謹慎と全室清掃では、お世辞にも釣り合いが取れているとは言えなかった。

しかも、自室謹慎など事実上処罰無しと言っているようなものだ。  
自分の部屋でベッドに横になりながら、昼寝したり校庭を眺めたりすることの一体どこが、処罰だっていうんだ？

明らかな不公平、差別、えこひいきであった。

僕が平民出だからか？！

違った。差別されているのは神宮ではなく、東雲であった。

教官室でどのようなやりとりがあつたかは、想像するに易かった。

なに？東雲生徒に厳罰を、だと？

いや！駄目だ、そんなことは絶対に駄目だ！

してはならん！

東雲生徒のお父上は参謀本部の東雲零弦少将閣下だぞ！将来陸軍の頂点に立つお方だ！

少将閣下の愛娘に、厳罰など下せるか！

ただでさえ竜兵科は陸軍内部で冷遇されおるのだ。

これ以上余計に空気を濁すようなことはできん。

ああ、わかつている。処罰無しでは他の生徒に示しがかんということば、よく分かっている。

ならば、事実上の処分無しでいいだろう？建前だけの処罰だ、それでいい。

彼女の成績表には何も手を付けるなよ。

そうだな、自室謹慎あたりでいいだろう。

うん、それでいい。それぐらいが一番だ。

あまり、波風を立てるな。触らぬ神に祟り無し

とまあ、おそらくそんな具合だろう。

それが、家柄の違いという現実であつた。

窓ガラスは、寒風にカタカタと揺れた。

神宮は雑巾を片手に窓を拭きながら、窓ガラスに映つた自分の顔と視線を合わせた。

夜の闇に浸かつた校庭を背にする窓ガラスは、鏡のように神宮の顔を映してくれる。

散切りにした黒髪。さほどふくよかでない頬。目は大きいが、鷹のような眼光が鈍い淀みを浮かべ、優しい印象ではない。

総じて言えば、決してブ男ではなく整った顔立ちだが、どこか人としての温かみに欠けていた。

笑顔がどこことなく皮肉めいた嘲笑に見え、人を睨み付ける時にこそ十二分の実力を発揮するような、そんな顔面であった。

サディストな男を好む女からは、たいそうモテるに違いないだろう。ただし神宮本人にはそのような趣味はかけらほどもない。

闇を背にしたガラスに浮かぶ自分の顔は、いつも以上に毒々しく見える。

（自分で言うのもなんだが、やはり僕の顔は人を幸せにするには程遠い顔つきだな…）

雑巾でガラスに映った自分の顔面を拭きながら、ふとどうでもいいことを思った。

そう言えば、僕と東雲は何もかも正反対なのかもしれない。

今は自室にこもり謹慎処分が解けることを待つ身である東雲を、不意に思う。

しのめれい  
東雲霊雲

軍人家系の名家の出であるあの少女に出会ったのは、龍空教導団に入学した時であった。

彼女とは同期である。

黒く長い優美な髪を頭の後ろで束ね、整った輪郭に大きな目、どこか鋭さを持つ眉毛は東雲の顔面を神宮とは正反対の印象に仕立て上げている。

明るく、暖かく、母性的。

人を幸せに出来る顔とは、つまりああいうものなのだろう。

神宮は東雲と出会った時、真っ先にそのような印象を持った。

性格もまた、思い切りがよく即決断行型で嫌なことは引きずらない類の人間である。

きっと今日怒鳴られたことも、明日には笑い話にしているだろう。そんな憎めない人間であつた。

彼女は、なぜか神宮によく接触してくる。

教導団の生徒には他にも貴族や役人や軍人や政治家の家系から来た連中がたくさんいるにも拘らず、なぜか平民出の神宮に近寄ってくるのだ。

それは、けして物珍しさからではない。

それが分かるほど、彼女は自然に、そしていつの間にか自分の横に立っているのである。

真意は測りかねた。

ただ単に神宮を友人とみなしているだけである可能性が高いのだが、神宮にはその可能性を受け入れられないわだかまりがあつた。

彼女がそばにいと、自分に足りないものを見せ付けられている気がしてならないのだ。

人としての暖かき、快活な性格、申し分の無い家柄、約束された将来。

それは、神宮が興味の無い振りをして、心のどこかで欲し、そして決して手に入れることのない宝物。

だから、『友人』として受け入れるには、少し難があつた。

もちろんそれが、卑しく卑屈な、黒い感情であることは神宮自身承知している。

だが、その感情はどうしようもないのだ、神宮にとっては。

とはいえ誰も彼の汚らしくエゴ的な一面を非難することは出来ない。それは、人間である限り手放すことの出来ない悲しい性<sup>さが</sup>であつた。

まだ、半分以上の窓ガラスが神宮の雑巾を待ちわびている。  
広い木造の講義室には神宮ひとりきり。

小刻みに揺れる窓ガラスの音が、静寂な夜を浮き彫りにさせる。  
こんな雰囲気は別に嫌いじゃない。

心の深いところで孤独を好むこともまた、自分が東雲のような人間  
にはなれない一つの原因だろうか。

そう自嘲気味にゆがんだ笑顔を口元に浮かべたとき、背後で講義室  
の扉が勢い良く開かれる音がした。  
突然のことにびっくりして心臓が不整脈を打つ。

「ここにいたかい！」

扉のほうから聞きなれた声がして、神宮は振り返った。

「…東雲?!」

快活な笑顔を浮かべた東雲は、よ!つと右手を上げて応えた。  
窓を拭いていた神宮の手は動きを止めていた。

「なんでここに?! 謹慎処分は？」

「んー? 抜け出してきた」

時刻は午後10時半。全員就寝し教官達の見回りも終わった頃だっ  
た。

「ほれ、あれだ! 一人でやるより二人でやった方が早く終わるだろ  
?」

「確かにそうだが…って、それ、どうしたんだ?!」

近づいてきた東雲の顔面に、神宮は異変を感じて指差した。  
右頬が、赤く腫れていた。

「ん！これかい？えつとね、へへー、私も殴られた！」

はあ？と、神宮は眉をひそめて口元をゆがめる。  
というか、なぜこいつは笑ってるんだ。

「殴られたって…女だろ？」

「ん。神宮だけ、つてのは不公平でらしくないってない！小松教官が一発くださったのさ！」

小松教官。先ほど神宮の顔面に鉄拳をぶちこんだ主任教官である。  
細身な人間が多い竜兵の中では珍しく大柄な男であった。  
そんな人物から一発頬にくらったというのだ。

「だ、大丈夫なのか？その、それ」

「なあに心配ないよ！軍人が死ぬのは銃弾に当たったときだけさ！  
大したこと無いね！軽い脳震盪にはなったけど」

「さすがに女相手に」

「んー。今の言葉はいただけいなあ神宮生徒。戦場じゃあそうはいかないよ！銃弾は男と女を区別してくれないからね。軍隊じゃ男も女も漢おとこにならなくちゃあ！」

「ああ…そうか。そうだな」

東雲の快活な笑顔と、悩みなどとは無縁であろう明朗な声になんとかどうでもよくなった。

「よし！さつそくやるかい、大掃除！全室清掃だつて？やりがいがあるじゃないか！どれ、雑巾一枚かしな！なに？一枚しかない？

駄目だよそんなじゃあ！全室終わる前に雑巾真っ黒になっちゃうよ？しかたないなあ私が用具室から雑巾を調達してきてしんぜよう！ちよつとここで待ってな！」

勝手に次々と喋り倒して物事を持っていかうとする東雲に、神宮は戸惑いながらもとつさに口を挟んだ。

ちよつと東雲が講義室から飛び出して用具室に疾走しようとする直前だった。

「ちよつと待て東雲！これは僕の処罰だし、謹慎の身なのに外でちやまずいだろ！自室にもどれ！後は僕がやる！」

今まさに講義室を飛び出さんとしていた東雲は、その声に振り返って言った。

「何言つてんだい。私の謹慎処分なんて、建前だけで処分になつてないことくらい知ってるだろ？学長が、私の親父に媚びへつらう為に計らつたんだよ。だから小松教官は、神宮だけが処分を押し付けられるのを齒がゆく思つて、私をぶつたんだ。自分が学長に処分される危険を冒してね。私だつて同じさ。あんたが一人で処罰を受けてる横で、部屋で布団に包まって寝るなんてね、気分が悪いってもんじゃないよ。それに、今回のことは、私があんたを誘つたんだから」

東雲の表情は今まで神宮に見せたことも無いほど陰しく、しかし暖かいものになっていた。

「いや、それでも……」

「ああ！もう！こういう時は黙つて手を借りな！私達『仲間』だろ？！それが粹つてもんだい！」



そう言うと、神宮の返答も確認も得ずに東雲は駆け出した。東雲の足が駆ける、その軽い音が夜の廊下にこだまする。

軽快で、なぜか透き通った音だった。

その反響音を耳に、神宮は半分乾いた雑巾を持ったまま、立ち尽くした。

『仲間』だろ

その言葉はなぜか、神宮にとって非常に奇妙な響きがあった。仲間。

言葉に出来ない、心のさらに中、胸の奥の奥で、何かが少し、熱く、いや、暖かくなった気がする。

（ただの言葉も、あいつが言うだけで、こうなんだから、なんだかな）

それが、東雲という人間なのだろうか。

神宮は窓に向き直り、窓拭きを再開した。東雲が戻ってくるまで、少しでも進めておこう。

あんたが一人で処罰を受けてる横で、部屋で布団に包まって寝るなんてね、気分が悪いつてもんじゃないよ

しかし、建前だけの謹慎処分かもしれないとはいえ、自室を抜け出したのが知れたら、今度は本当に処分されるかもしれないのに……。よくもまあ抜け出てきたもんだ。どうしたらそんな熱くなれるんだか。

多分それは、僕と東雲が『仲間』だからとかじゃなく、単に彼女が漢だからなのだろう。

そう思つて神宮は、結局自分が、彼女から送られた『仲間』と言う言葉を正直に受け止められていないことに気づいて、自然と笑つてしまつた。

例のごとく、窓ガラスに映つた神宮の微笑みは皮肉めいた笑顔であつたが、今度はどこかに暖かさがあつた。

もっとも、神宮本人がそれに気づいているかは別問題であるが。

廊下の向こうから、東雲が駆け戻ってくる軽い足音が響いてくる。

### 参話 少年少女3

深い眠りから、鈍く目が覚める。

ゆつくりと薄目を開くが、すぐにたまらず目を閉じた。

粗末な木枠の窓ガラスを突き抜ける朝の日差しは、東雲<sup>しのめいぶん</sup>霊雲の眼球を容赦なく攻撃する。

寝ぼけ眼にはいささか眩しすぎた。

こらえて目を開き、四畳しかない小さな部屋の壁に掛けられた時計を見る。

11時。

よく寝たな。

そうだ。昨日、と言うか今日は、神宮に付き合っ  
て掃除をしていたのだ。

全校舎の全室清掃。

途方もない大掃除。

それは、勝手に翼竜を飛ばしたあげく総員点呼時刻まで戻ってこなかった東雲と神宮に対する処罰の一つだった。

その大掃除は昨日の夜9時から始まって今日の朝4時に終了した。

それからは東雲は急いで自室に戻り、神宮は教官室前の廊下で教官が起床するのを待った。

懲罰清掃の完了を報告するためだ。

東雲は自室謹慎を命じられていたため、それには付き合えなかった。

「総員教おー練射撃用おー意！！撃てえ！！」

軽い銃声が立て続けに響く。

校舎の裏側にある演習場で、生徒達の射撃訓練が行われているのだ。東雲は寝ぼけ眼をこすり、小さく粗末なベッドから上半身を起こす。

長い黒髪に寝癖がついていた。

「次弾装おー填ー!!」

教官達の号令が遠くから聞こえてくる。

もう、教導団の一日が始まっていることを実感した。

いつもなら自分も外で走り回るか講義室で受講している時間だ。

「そう言えば、こんな時間まで眠っていたのは、もう何年ぶりなんだろうかね…」

それは、東雲にとって非常に懐かしい体験である。

彼女が昼ごろまで怠け心の赴くままに床に伏せていられたのは、幼年の頃だけであった。

もう5、6歳になると、休日であろうがなんであろうが常に起床時刻早朝6時を厳守させられていたのである。

それはつまり、彼女の実家が代々皇族に仕えてきた伝統ある職業軍人の家系だからであった。

東雲の厳格で、かつ教育精神に溢れた父親である東雲零弦は、一人娘の彼女を軍門東雲家に恥じぬ人間に育てようと熱心であった。

小さいころから柔術、剣術、馬術、戦史学、歴史学、読み書きを教え込み、文字通りの英才教育を叩き込んだ。

それは異常なほどの詰め込み教育で、並の人間なら頭が壊れてしまいそうな質量のものであったが、彼女はなんとか耐え忍んだ。

幸運ながら彼女は、東雲一族随一の秀才であった。

しかし、それであっても、そこまで異常なほどの教育方針が取られたのは、東雲零弦が彼女、霊雲以外の子供を持てなかったことによる。

女兒に、家督相続権は無い。

つまり今現在東雲家には跡取りがないのだ。

本来ならば男児が生まれてくるべきであった。

すくなくとも東雲零弦を含め東雲家の関係者はみな男児を望んでいた。

しかし、生まれてきたのは東雲靈雲だった。

女兒であった。

必要とされぬ子供であった。

東雲家の関係者や親族は、落胆し、靈雲を蔑視し、早く次の子供を、跡取りとなれる男児を望んだ。

しかし、零弦の妻、東雲菊は、しのめきく子供に恵まれぬ体であった。

医者からは、二人目は生めないだろうと言われた。

親族は側室を設けると言った。

つまり、愛人を作ってそいつに男児を生ませろ、そういうことだった。

この時代、側室は珍しくない。

零弦はその提案を一蹴した。

「菊の他には、女は抱かん」

頑固で、厄介なほど優しい男であった。

そして零弦は、妻と同じほどに娘を愛した。

親族一族から『あの娘が男児であったならば。どうして女子としておなこ生まれてきたのか』そう陰口を叩かれる娘を、愛した。深く愛していた。

だからこそ、愛娘を周囲の蔑視や悪意から守るために、叩き育てた。厳しく、容赦なく。

周囲が、絶対に認めざるを得ないような立派な人間に育て上げるために。

すべての無茶な教育は、すべて娘を思うが故であった。

猫であっても、虎に育て上げねばならない。

虎でなければ、生きてはいけない。

名家の中の名家、東雲家にあつては、望まれぬ女兒が生きてゆくのは並大抵のことではない。

何よりも、いらぬ子として育てるつもりはなかった。

父の厳格な教育が深い愛情を源流としていることを幼い頃から東雲靈雲は感じ取っていた。

彼女は全身全霊を以つてその愛情に応えた。

そして、天童と呼ばれるほどの知識と実力を備えた。

12歳の頃には剣術試合で25歳の男を打ち負かし、歴史の知識では小学校の教師を圧倒していた。

朝は誰よりも早く起き、夜は誰よりも静かに眠った。

まさしく、秀才。

んが、なぜか口調だけは上品にならなかった。

「ふああ……ん、いい朝だねい。お天道様も元気で何よりだ」

それはきっと、厳格に育てられたゆえの反動なのだろう。

厳しく育てられたがために、他人には優しく、暖かく接してしまう。快活な性格も口調も、父の厳格な、しかし愛情が溢れた教育が生んだ幸運（？）な副作用であった。

「よいしょっと、さあて、一つ顔でも洗いに……」

部屋を出かけて自室謹慎の身であることを思い出した。

あちやくと額を叩くしぐさをしてから、ベッドに乱暴に腰を下ろす。部屋は狭かった。

この狭苦しい部屋で一日を過ごさなければならぬ。

何もすることも無く。

「建前だけの処分…多分そうなんだろうけど、これは結構こらえるかもねえ…」

今まで厳格に決められた行動予定表にしたがつて一日を過ごしてきた東雲にとつて、何もすることのない24時間とは想像の範疇外のものであった。

暇すぎる。そんなものは考えたこともない。

そう言えば、昔何かの書物で

「牢獄の罪人にとって一番つらいことは、何もすることがないことである。時の変化を感じさせるものが存在しない閉鎖空間は、まさに無限地獄ならぬ無限時刻なのだ」

そんな一文を目にしたことがある。

これはとんでもない。

しかし幸いなことに、東雲の部屋には牢獄と違い窓があった。

外の風景が見れることは幸いである。

時の変化を感じ取れる。

何よりも、空が見れることはありがたい。

東雲は空が大好きだった。

あの無限の青い空間は、風が吹き荒れる乱暴な一面はあってもとても美しい世界だ。

翼竜の背中に乗ると、本当にそう思う。

他の生徒がどう思っているかは知らないが、自分にとっては自由そのものを体験しているような気になって心がはずむのだ。

空は青く、でも透明で、寒く、それであっても涼しく、爽快である。年中空を漂う雲たちは、さぞかし楽しい一生を過ごしているに違いない。

教導団は空がこれほどまでにすばらしいことを自分に教えてくれた。だから自分を教導団に入れてくれた父親を、そして教導団自身に感謝している。

「いいねい。今日はいつも以上にいい青空だ。お天道様は元気だし、雲もどっかいつちまってるし、何より透き通ってる。こんな空を飛べたら、さぞかし気持ちいいんだろなあ。光風も飛びたがっているに違いない」

光風とは、教導団から東雲に与えられた翼竜であった。

今は足を少し痛めて療養中だ。

生まれてから7年。まだまだ子供である。

本来なら人間馴れしている成龍の方が生徒達の訓練には適しているのだが、なにぶん翼竜は個体数が少ない。

貴重な成龍たちは根こそぎ正規の竜兵部隊に持っていかれているのだった。

教導団では未来の翼竜兵と翼竜自体の養育を主任務にせざるおえなかった。

竜兵という存在は、まだまだ発展途上の存在であつたからだ。

「軍隊の花形は戦闘歩兵か騎兵だと言っけれど、竜兵だつて悪かないやねい」

東雲はすることもなく、小さく粗末なベッドに仰向けに倒れた。



ベッドかきしむ。

東雲が龍空教導団に入った理由は唯一つ。  
そこしかなかったからだ。

東雲は父親の厳格な軍隊式の教育もあって、軍隊に入することを希望した。親族達に自分を認めさせるには軍人になることがもっとも効果的だとも思った。

東雲本人は親族の目など気にしていなかったが、父親にとって大きな問題であるならば、払拭せねばならない。

しかし、軍隊は古来より男の領域であった。

ましてや女兒に家督相続権を与えられていないこの時代では、女が軍に入隊するなど常識はずれもいいところである。

陸軍歩兵科からは断られ、

陸軍騎兵科からは謝絶され、

陸軍砲兵科からはそっぽを向かれ、

海軍からは黙殺された。

無理だと思われた。

例えばいくら東雲の父親が陸軍の実力者であっても、こればかりは乗り越えられそうに無かった。

しかし、唯一つ、一つだけ、穴があった。

陸軍竜兵科である。

竜兵科は、女にもその門戸を開いていた希少な軍部であった。

翼竜の背中に乗るなら軽い人間の方がいい、という判断からであると知らされた。

さらに、竜兵科の所有する翼竜の多くが雄龍であったため、異性の

方が懐きやすいという理由もあった。

かくして東雲という少女は陸軍龍空教導団に入団する。そこは竜兵を育て上げる陸軍の教育機関であった。

入団の動機そのものは軍隊に入るための踏み台というものでしかなかったが、今となつては教導団にすることが心地よくなっている。軍隊式の厳しい教育方針は、父親の厳格な教育を受けてきた東雲にとっては慣れ親しんだものであつたし、空を飛ぶのは楽しくてしょうがない。

それに、いい友人にも出会えた。

「…神宮は今頃なにしてるのかねい」

ベッドに横たわりながら、天井を見つめていった。

粗末な板が貼り付けられてある。

校舎は全て木造であつた。この時代、鉄筋製の建築物は一部の政府庁舎でしか採用されていなかった。

「それにしても神宮には迷惑かけちまつたねい。卒業の暁には、よっぽど口を利いてやらないと。父上にはなんと言おう」

神宮をはじめに見たとき、東雲は新鮮な感覚に襲われた。

政治家や軍人の家系が多い教導団の中で、彼だけは平民出だった。

他の生徒達が自身の家柄や門地を引きずって生きている中、神宮はそういうことに関しては一切無頓着であり自由であつた。

東雲自身が軍門名家東雲家の、そして陸軍の実力者である父親東雲零弦の名を背負って生きている身であつたから、そういうものに一切縛られない自由な神宮が新しい発見であつたし、興味が湧いた。

神宮本人と話してみると、興味はもつと違う感情へと昇華した。

神宮は皮肉屋で、とんがった世界観の持ち主で、他人に対して本音をあまり漏らさず、しかし、変に素直な性格であるように思えた。簡単に言えばひねくれているのだ。それがまた子供らしくて母性をつつくのだ。

それに理知的であつた。

物事の本質を理解し、ある問題に対して容赦なく合理的な答えを叩き込む。

中途半端な答えや、問題をうやむやにして流そうとする人間に対しては異常というほどの軽蔑を抱く人間でもあつた。

伝統や慣習よりも合理的なものを好む性格。

神宮は教導団内で友人が少なかった。

それにもうなずける。

教導団にいる政治家や軍人や貴族や役人の子息達は、神宮が否定する無意味な伝統や慣習を引き継ぎ背負う者達が大勢いたからだ。

神宮は教導団でのつまはじき者であつたが、本人は一切気にしていないらしい。

確かに、鷹のように鋭く、汚泥のように鈍くにこつたその大きな瞳は、周囲を寄せ付けまいとしているように思える。

「うつそつけー本当はさびしがりやのくせにー」

不意に口から言葉が漏れた。

「ああつと。やることがないと独り言が多くなっちゃうなあ」

東雲はそう言つと愉快そうに微笑んだ。

さて、やることがない。

今日はどうするか。

こうやって昔の思い出に浸りながら一日を過ごすのも悪くはないかもしれない。

そう思つて、窓辺に置いた一升の花瓶に目をやった。

龍連山脈からとつてきた薄蓮花が挿されていた。

綺麗だ。

謹慎が解けたらこれを実家に送ろう。

病床に伏せる母に送つてやるのだ。

東雲の母は、6ヶ月前に血を吐いて倒れた。

元から病弱な母であつた。

今は容態が安定しているが、常に医師がそばに控えているそうだ。

いつも父に厳しく躰けられる東雲を、遠巻きに見守っていた母だつた。

夜はこつそり部屋に忍び込んで話をしてくれた。

風邪をひいたときに作ってくれた粥はうまかつた。

父の存在が自身の大部分を占める東雲にとって、母は薄蓮花のように淡い存在であつたが、しかし常に心地よい記憶と共にある。

元気になつてくれれば、幸福なことこの上ない。

母は、男を生めない嫁とどれほど罵られたらうか。

自分と違い強くなれなかつた母は耐えるしかなかった。

可哀想な人。

父は母よりも娘の自分に大きな時間を割いた。きっと母がそうするよう頼んだのだろう。

弱いけれど強い女。また今度一緒に話をしたいな。  
今度実家に帰省するときには、元気になっていてくれるだろう  
か。

「そう言えば、私は自分の親についてはよく話すけど、神宮の親の  
ことについては聞いてないなあ」

ふと、そう思う。

実際のところ、東雲の日常的な対人思考の多くは神宮のために割か  
れていた。

「謹慎が解けたら、真っ先に話しかけにいくかい」

そう思っで、もう一度眠りについた。

いつ話しに行こう。いつでもいいか。

時間が余っているときなら、いつでも。

きっと大きくよんだ瞳を向けながら、時々皮肉めいた笑みを口元  
に浮かべて、めんどくさそうに迷惑そうに、

なんだかんだいって付き合ってくれるに違いない。

## 閑話 世界（前書き）

この話のPC版レイアウトでは背景に世界地図が表示されています。世界観をよりよく把握するためにはPCから閲覧することをお勧めします。

## 閑話 世界

世界がいつ始まったかについて確たる証拠とともに断言できる者はいない。

ただし、現存する最古の資料から推定するにおよそ2000年ほど前であったするのが、この世界でのもっとも有力な学説である。

世界と歴史は一つの大陸とともにある。

固有名詞を持たず、ただ象徴的に『大陸』<sup>「コンティネンス」</sup>と呼ばれるそれは、頭でつかちな雪だるまのような形状をしている。

北半球に浮かぶ陸地が南半球に浮かぶ陸地の約二倍ほどもあり、人口は大陸北部に集中していた。

この大陸は、今現在確認されている内ではこの世界唯一の大陸である。

つまり『大陸』は『世界』とある意味同義語であった。

この大陸に国家と呼ばれるものが誕生したのは800年ほど前。

大陸北部の遊牧騎馬民族セルン人によるちいさな王国だった。

北方の広大なフランデン平野を民族始祖の地とする彼らは、長らく

故郷の平野を駆け巡り狩猟・牧畜生活を営んできたが、およそ65

0年前に大陸北部を覆った異常気象、<sup>フリグス・カセス</sup>『冷災害』によってフランデ

ン平野が氷結の荒野と化すと、食料と温暖な土地を求めて極北の平野から南下を開始する必要に直面した。

これが、人類史上最大の帝国を作り上げる物語の始まりである。

セルン人はフランデン平野南部の騎馬民族オラン人の土地を侵略し、制圧すると、新たに王国の首都を置き『セルニア（セルン人の土地

の意)』と呼ばれる新生国家を作り上げた。

冷災害によって故郷を追い出されたセルン人はようやくのことで安寧の地を、新たに母なる大地を得られたかと思っただが、一度口火を切った侵略はそう簡単には止められなかった。

征服されたオラン人がたびたび反乱事件をおこし始めたのだ。

新たに樹立したセルン人の王国も、反乱によって揺らぎ始めた。

そこで、王国に安定をもたらすためにセルン人が行ったこと、それはつまり戦争だった。

不満を持つオラン人によって構成される軍隊を編成し、彼らに他地域を侵略させることによってオラン人の不満を外の世界にそらすとしたのだ。

戦争に協力する見返りとして、征服した地域の一部や作物をオラン人に与える、セルン人に有利なギブアンドテイクだった。

この計画は功を奏する。セルン人とオラン人によって構成される『セルニア』軍は各地で他民族を侵略、撃破、征服、支配していった。領土は劇的に拡大し、オラン人の不満は消え去って行った。

そして新たに征服した土地でもその地の民族に対し同じような政策を実施し、ネズミ算式に軍と領土と、そして侵略戦争は拡大していく。

しかし逆を言えばそれは、セルニア王国が戦争によってでしか国家を安定させることができない脆い存在であることを同時に立証していた。

やがていまから380年程前、王国『セルニア』は大陸南端を除くほとんど全域を征服しつつ、侵略すべき土地が無くなったため侵略戦争の時代は幕を下ろす。

このとき、セルニアはまぎれもなく世界最大の領土を持つ世界最強の王国だった。

しかし、それから続く新たな80年は、今までセルニアが経験した



ことのない『平和の時代』だった。

文化が栄え、子供は戦地に駆り出されることもなく、生活は豊かになり、経済は劇的に成長した。

フリグス・プロスベリタス  
大繁栄時代

人類史によって歓迎されるべきこの躍動感溢れる福音の時代は、セルニア王国の支配エリート達からは決して歓迎されなかった。

増大した異民族の人口と天井知らずの経済成長は、大陸全土を支配するセルニア王国ですら管理し、監視しきれるものではなかったのだ。

やがて、数を増した異民族と財力を持つ大商人達が王国の支配の幹を傷つけ始め、国王周辺の役人達の腐敗もあって今から300年前、暦1700年ごろ、ついに大陸を支配した大王国は崩壊した。

大陸南部の砂漠地帯では油売りの大商人達によって『イルパニア』が建国され王国から独立し、大陸北西部では貴族達による『欧共連合王国』が誕生し、北東部では雪原民族ツアルク人による『ツアルキスタン』が成立した。

残ったセルニア王国領も、酒造業で財を成し大きな権力を握った大貴族『ラウプクルツ家』が、国王一族を暗殺して新たな王国、『ハルメニア』に作り変えてしまった。

かくしてセルニアは歴史の果てに姿を消し、新たに誕生した四つの国家による戦国絵巻物語が歴史を刻み始める。

しかしその戦乱時代も、150年前に『ハルメニア』が『ツアルキスタン』を併呑し、大陸中部・北東部を支配する一大国家『ツアル

キスタン「ハルメニア帝国」を成立させることにより一応の幕を下ろす。

かくして現代に至るまで各国は微妙な小競り合いを繰り返しつつ、表面的にはお互いを認め合いながら蒸気と石炭による繁栄を謳歌している。

現在は、暦1901年。蒸気機関が発明されてから約40年である。

しかし、これら波乱万丈な大陸歴史物語も、大陸の東端、そこからアーリン諸島を伝ったその先にある極東の島国、『皇州帝国』には無縁であった。

## 皇州帝国

北から順に北尾島、葦原大島<sup>あしはらおおしま</sup>、南諸群島、沖島の四つの地域からなるこの小さな島国は、皇王と呼ばれる人物を支配者とする新興国家である。

およそ80年前に戦国時代を脱し近代国家として産声を上げた。

人口は約2800万人。

大陸諸国と比べて著しく少ない。

世界的にも今までまったく注目されていなかったこの国が、にわかに名声を獲得するのは産業革命以降、良質な石炭と世界最大級の金鉱脈が存在することからだった。

今では、皇州帝国も慎ましかにほのかな繁栄を味わっている。

そしてこの国で生を受けた二人の少年少女が、この国の歴史に胸躍らせる活劇を記すこととなる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3097d/>

---

空の皇兵

2010年10月14日15時44分発行